

安政期常陸国土浦町における検地

その顧末と意義

木塚久仁子

Taxation Surveys Carried out in Tsuchiura-machi, Hitachi Province at the End of the Edo Period: Their History and Significance

はじめに

- ① 検地に至る経緯
 - ② 検地の実施
 - ③ 各層の対応
- おわりに

【論文要旨】

常陸国新治郡土浦町は、東崎町と中城町という二つの町から成っている。本論では東崎町において安政二（一八五五）年に行われた検地の事例を紹介する。安政二年、土浦藩は藩財政の窮乏に対する年貢増徴政策のひとつとして町方の反対を押しきってこれを断行した。

この検地において三人の人物に注目した。そのひとり色川三中（二八〇五～五五）は中城町の商家に生まれた。国学研究にいそしみ、特に度量衡や田制、古代の枡の研究を究め、自らが居住する町の検地が不当なものであることを立証しようとした。

三中の朋友であった長嶋尉信（二七八〇～一八六七）は土浦藩領常陸国新治郡小田村出身の百姓でありながら江戸で測量術や暦学を学び、田制研究の功績が認められ天保十（一八三九）年水戸藩に取り立てられた。天保十四年には土浦藩に仕官替えとなり、嘉永五（一八五二）年には東崎町分地改御用掛として東崎・中城両町の検地にお

いて実務を担当して中心的な役割を果たした。

そしてもう一人、内田佐左衛門（一八〇六～五八）は東崎町の間屋と町年寄を勤める家に生まれた。天保八（一八三七）年、土浦町で起きた持合金に関する騒動で小前百姓の立場で名主らと対立した佐左衛門は町役人を罷免され、隠居後は関東取締出役の道案内として働き、安政二年の検地においては長嶋尉信に協力しもう一人の検地の立役者となっていく。

同じ時期に土浦町を生きさせた三人の、検地への対応と論理はそれぞれの生き方と思考に基づくものであった。特に内田佐左衛門においてこの検地は、持合金騒動、関東取締出役の道案内に続いて佐左衛門が歴史上登場するいわば第三の舞台であり、土浦町が生んだ顔役としてのあり方を体現するものであった。